

韓国語学習者による スピーチビデオ活用の実践報告

岡田靖子・澤海崇文¹・いとうたけひこ²

Abstract:

Speech videos for pedagogical purposes: A study of Japanese learners of Korean

When learners view their own and their peers' speech videos, they can reflect on their performance in the target language and learn from their peers. This study reports on how speech videos helped Japanese learners gain awareness of their own and their peers' performances in speaking Korean. A total of 10 first- and 6 second-year female students learning Korean at a two-year college program participated in this study. The students in the former group delivered a short, prepared speech about their life experiences, while the students in the latter delivered two speeches about their life experiences and their spring break, respectively. The speeches of the two groups were recorded so that the former could reflect on their performances and the latter could compare their performances at two points. To understand the effectiveness of the viewing exercise, an open-ended questionnaire was administered online, and the responses were analyzed using word clouds. Our results show that video viewing enabled learners to increase their awareness of language use and to visually monitor language development, although there were no differences in the effect of video use between the two groups. The findings suggest that viewing speech videos may benefit learners of any language by making their progress visible.

Keywords:

video research, reflection, Korean as a foreign language learner, word clouds

要 旨 :

外国語学習における他の学習者自身のビデオ視聴には、パフォーマンスの振り返りや他者からの学びを可能にする効果がある。本研究の目的は、ビデオ視聴によっ

¹ 流通経済大学

² 和光大学

て、日本人学習者の韓国語によるパフォーマンスへの気づきがどのように高まるかを報告することである。研究参加者は短期大学で韓国語コースに所属している女子学生16名（1年生10名と2年生6名）であった。グループ1（1年生）は事前に準備した自身の経験についての短いスピーチを1回、グループ2（2年生）は事前に準備した自身の経験と春休みについての短いスピーチを2回、それぞれ発表した。その発表はビデオ撮影され、1年生グループはパフォーマンスの振り返り、2年生グループは2時点での比較を行った。ビデオ視聴の効果を確認するため、オンラインで自由記述回答を求め、その回答をワードクラウドで可視化した。その結果、2グループではビデオ活用方法の違いによる効果は見られなかったが、学習者の言語に対する気づきを高め、韓国語の向上を可視化する効果があることが示された。本研究の結果から、学習者ビデオの視聴は、英語以外の言語を学んでいる学習者にとっても有益であることを示唆している。

キーワード：

ビデオ研究 振り返り 韓国語学習者 ワードクラウド

1. はじめに

近年の急速な情報のデジタル化に伴い、若者の間ではスマートフォンで撮影した動画をYouTubeなどの動画共有サービスに投稿し、多数の視聴者と共有することは当たり前になってきている。教育現場でも、外国語授業などでは学習者による海外での生活や文化の直接体験が難しい場合、それらの視聴覚的情報を正確に伝える手段として、ビデオ映像（以下、ビデオ）が広く用いられることがある。また、学習者のパフォーマンスを撮影し、そのビデオを視聴すると、学習成果を可視的に確認することも可能である。このように、学習者ビデオの観察・分析は、言語や非言語を媒介としたコミュニケーション能力を向上させ、他者への気づきや自己主張を通した学習者の「人間性の涵養」をもたらすことが指摘されている（岡田ほか, 2018）。

ビデオを活用した授業実践は学習者を中心とした能動的な学習法の1つである（岡田ほか, 2018）。学習者がビデオを見るだけであれば、それは受動的な活動にすぎない。しかし、ビデオの視聴以外に自己評価やピア評価などの活動を取り入れると、学習者の学びに対する態度が積極的になることも示されているため（岡田・いとう, 2014）、教育現場でのビデオ活用は学習者の成長に寄与することが期待されている。

人の行動やパフォーマンスを録画し、分析することを取り入れた「ビデオ研究」(video research) には、教育分野 (Codreanu et al., 2020; Yang, 2021) や医療分野 (Meadows et al., 2020) を含む様々な場面での実証研究が挙げられる。教育現場では、教育実習生の技術力を向上させるためにビデオが導入されている (Hamel & Viau-Guay, 2019; Gröschner et al., 2018)。外国語教育におけるビデオ研究では、外国語能力やパフォーマンス向上のために学習者のパフォーマンスをビデオ撮影し、そのビデオを見ながら行う省察の有効性が検証されている (松岡, 2018; 三木, 2020; Okada et al., 2017, 2018a, 2018b)。このようにビデオを用いた振り返り (reflection) は、学習者のコミュニケーション能力や「自己効力感³」 (self-efficacy) のような信念を強化させるのに効果的であると指摘されている (Bandura, 1977, 1986)。

外国語教育では、スピーチやプレゼンテーション指導の場面を使ってビデオ研究が実践されている (Adams, 2004; 松岡, 2018; 三木, 2020; 岡田ほか, 2018)。例えば、オーストラリアの研究では、研究対象者である英語を第二言語とする大学院生が、英語を第二言語とするピアあるいは専門家をモデルとしたビデオのいずれかを視聴し、その効果を自己効力感の観点から検証した (Adams, 2004)。ビデオ視聴の事前・事後に実施された質問紙の回答を分析した結果、専門家のモデルより、研究対象者と類似した経験を持つピアをモデルとしたビデオを見た対象者のほうで視聴の効果が有意に高く、対象者の自信を高めることが明らかになった。この結果は、他の学習者のビデオ視聴が社会的比較⁴ (Festinger, 1954) をもたらす可能性を示唆している。

国内のビデオ研究では、その対象の多くは英語学習者である (松岡, 2018; 三木, 2020; Okada et al., 2018a, 2018b)。例えば、大学の英語授業でレベルの異なるピア学習者のスピーチビデオをモデルとして学生に提示したところ、学生はレベルの高いピアモデルの良い点を自身のパフォーマンスに取り入れようとする一方、レベルの低いピアモデルの視聴では、自身のパフォーマンスで注意すべき点に気づくことを報告している

³ 自己効力感とは、自分が特定の行動について達成する能力を持っていると感じることである。

⁴ 社会的比較とは、自分と周囲の人との比較をすることで、社会における自分の位置を確認することである。

(Okada et al., 2018b)。三木 (2020) の研究では、学生が自身のビデオを視聴すると、プレゼンテーションでの話し方などのデリバリーに対する気づきを高める効果があることを指摘した。松岡 (2018) は、学生がスマートフォンを使ってプレゼンテーションのリハーサルを録画し、その映像を視聴しながら自己省察を行うことによって、プレゼンテーション能力が向上したことを報告している。一方、英語以外の学習者を対象にしたビデオ研究は十分とは言えず、国内で 2000 年以降、学習者が増加してきた韓国語学習者についても然りである。そこで本実践では、日本人の若者の間で増加している韓国語学習者に着目し、ビデオ活用の教育的効果の検証結果を報告する。

2. 韓国語学習者のビデオ活用の実践

2.1 取り組みの目的

今回の取り組みでは、1 つ目にスピーチ発表ビデオの活用方法の違いによる教育的効果を確認することを目指す。2 つ目に、英語以外の外国語学習者のビデオ視聴による効果への認知を検証する。その理由として、英語学習者によるビデオ活用ではその教育的効果が報告されているが、英語以外の学習者による活用の報告はほとんど行われていないことが挙げられる。

2.2 対象者

短期大学で韓国語コースに所属している女子学生 (1 年生 29 名, 2 年生 13 名) が対象であった。本実践の概要を口頭および書面で説明し、協力を呼びかけたところ、16 名 (1 年生 10 名, 2 年生 6 名) が研究参加への同意を示した。参加者の平均年齢は 19.2 歳であった。

2.3 自由記述設問

自由記述の設問は、Web アンケート作成ツール (Google Forms) を使って作成した。設問 1 から 3 は日本語で回答を求め、使用する文字数は特に指定しなかった。設問 4 は 5 段階評定 (1: ほとんど効果がない, 5: とても効果がある) で回答を求めた。すべての回答にかかった時間は 10 分程度であった。

1. 自分自身のスピーチ発表のビデオ映像を見ることについて、良いと思ったことについて詳しく書いてください。
2. 自分自身のスピーチ発表のビデオ映像を見ることについて、良くないと思ったことについて詳しく書いてください。
3. 他の学生のスピーチ発表のビデオ映像を見ることについて、どのように思いましたか。詳しく書いてください。
4. 授業のなかでスピーチ発表をビデオ撮影し、その映像を他の学習者と一緒に振り返ることは、外国語学習にどのくらい効果があると思いますか。

2.4 手続き

本実践の目的 1 を検討するために、自由記述設問 1-3 に対する回答をテキストマイニングで分析し、その可視化結果をもとに特定の単語がどのような文脈で使用されているのかを確認する。目的 2 の検討では、設問 4 の回答を統計分析する。

本実践は、第一著者が担当する「基礎ゼミ」という必修科目で行われた。この科目では、グループでの意見交換やプレゼンテーションを通して、学生生活に必要とされる学力を強化すること、PDCA（計画・実行・評価・改善）サイクルを実践することなどを目指していた。

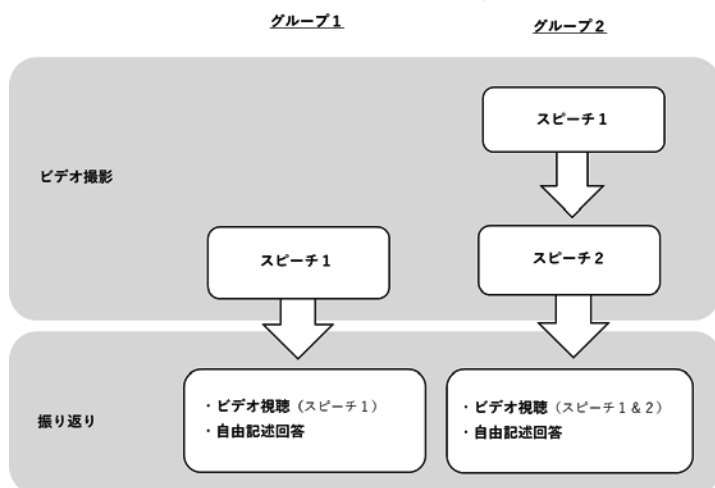
韓国語学習者のビデオ活用のような試みは語学授業で実施されるのが一般的であるが、本実践は語学授業以外で実施された。その理由として、1 つ目は、学生が実際にスピーチを実施し、その映像を視聴するという一連の活動が PDCA サイクルと一致し、基礎ゼミにおいて実施するのに適していると考えられたからである。2 つ目は、本実践では韓国語について高度な知識が求められていなかったため、語学授業で行う必要はなく、第一著者が担当する授業で実践できると考えられたからである。

ビデオ撮影とデータ収集の手順を図 1 に示す。グループ 1（1 年生）は 2019 年 7 月にビデオを撮影した。学生は韓国語で「自己紹介」（1 分前後）をするよう事前に指示された。発表の様子は第一著者がビデオカメラで撮影した。2020 年 1 月に対面授業で実施された振り返りでは、まず学生が「自己紹介」のビデオを視聴し、次に各自のスマートフォンからオンラインで

自由記述式アンケートに回答した。

グループ2(2年生)は、1年次であった2018年6月から7月にかけて1回目のスピーチを発表した。グループ1と同様、韓国語での「自己紹介」(1分前後)をビデオで撮影した。2回目は2019年4月に「春休みの過ごし方」をテーマとし、1回の授業で全員が発表し、第一著者がビデオを撮影した。振り返りは2020年1月に対面授業で実施した。学生は「自己紹介」と「春休みの過ごし方」のビデオ2種類を視聴後、各自のスマートフォンからオンラインで自由記述式アンケートに回答した。

図1 ビデオ活用の手順



2.5 分析

オンラインのテキストマイニングツール (User Local⁵) を用いて、自由記述回答を分析した。テキストデータから出現頻度の高い言葉を抜き出し、出現回数に応じて文字の大きさや文字を色分けして特徴的な語を可視化するため、スコア⁶順でワードクラウドを作成した。ワードクラウドを

⁵ 次のHPを参照。<https://textmining.userlocal.jp/>

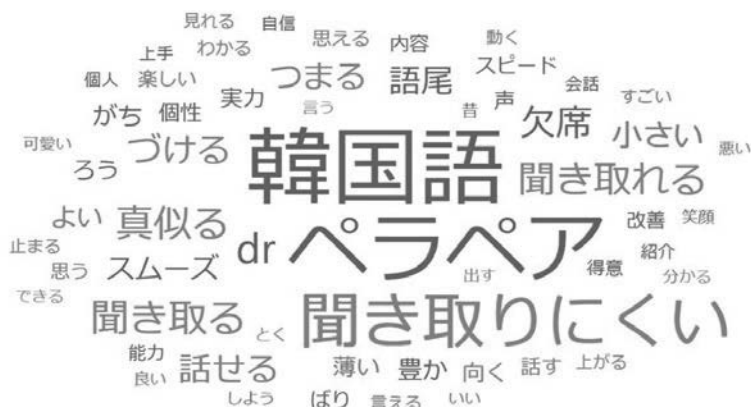
⁶ このスコアは、Term Frequency Inverse Document Frequency (TF-IDF) 法を用いて抽出された値のことで、「思う」や「ある」などの一般的によく使用される単語は重みづけを軽くする一方、調査対象であるテキストだけに出現する単語には重要度が加味され、スコアが高くなる。スコアの算出方法については、次のHPを参照。<https://www.learndatasci.com/glossary/tf-idf-term-frequency-inverse-document-frequency>

含むテキストマイニングは、大量のテキストデータ処理に適している分析手法である。本実践のデータは大量ではなかったが、データに含まれる単語や表現の使用頻度を可視化でき、テキストの内容を一目で印象づけると考えられることから、ワードクラウドを使用した。統計分析にはフリー統計ソフトウェア（jamovi⁷）を使用した。

3. 結果

自由記述回答に使用された文字数の合計は1,625字で、1文に使用された平均文字数は33.85字であった。各グループの傾向を理解するために、この回答をテキストデータとしてスコア順によるワードクラウドを作成した。各設問に対する協力者のコメントが短く、設問ごとに分析するのは難しいと考えたため、設問1から3の回答を統合することにした。統合した回答の可視化結果を図2と3にそれぞれ示す。

図2 ワードクラウド分析の結果（グループ1）



⁷ 次のHPよりダウンロード。<https://www.jamovi.org/>

図3 ワードクラウド分析の結果（グループ2）



グループ1は「韓国語」という語以外では、「ペラペラ⁸」や「スムーズ」「聞き取りにくい」「聞き取れる」などの話し方（delivery）に関する語が使用されていた。一方、グループ2はスピーチを2回発表しているため、「1年」や「2年」などの比較に関連した語の使用が見られた。1年次の秋学期に6か月韓国に留学した学生もいたため、「留学」という語も使用されていた。また、「恥ずかしい」や「羨ましい」のような心的状態を表す形容詞も含まれていた。1年次と2年次、留学経験者とそうでない学生との比較について言及した「成長」や「変化」という語も見られた。

ワードクラウドの可視化結果をもとに、設問1から3への自由記述回答で出現した単語がどのような文脈で使用されていたかをグループごとに検討した。まず、「学生自身のビデオ映像の視聴についての長所」（設問1）に対する回答であるが、グループ1は学習者の語学力に対する客観的評価を述べているのに対し、グループ2は1年次との比較についての記述が多かった。グループ1のスピーチ発表は1回であったが、ビデオ撮影してから視聴するまで半年経過していたことから、学生が「昔の自分が見られた」（学生7）や「自分の韓国語を話すスピードや語尾が上がりがちであるなどの良い点や悪い点に分かり、改善しようなどと気づける」（学生9）と述べているように、自身のパフォーマンスに対する気づきを高めることも示

⁸ 図2では「ペラペラ」となっているが、恐らく「ペラペラ」と入力しようとしたと考えられる。

された。また、グループ2の学生は「1年次よりも2年次のほうがスラスラ韓国語を話せていた」(学生14)や「自分の変化が分かって面白かった」(学生11)と述べているように、2時点における学習者自身のパフォーマンスを比較していることが示された。

設問2の「学生自身のビデオ映像の視聴についての短所」に対する回答では、グループ1は言語使用についての言及が顕著であり、「韓国語が聞き取りにくいところがある」(学生2)や「声が小さくて何を言っているのかききとれなかった」(学生6)などと振り返っていた。一方、グループ2は心的状態や改善点に関連した語の使用が特徴的であった。例えば、「みんなの前では恥ずかしい」(学生12)や「とても恥ずかしい」(学生15)のような心的状態や、「紙を見ながら話していたので、堂々と話したほうがいいと思った」(学生13)、「声色が暗い。手がよく動く」(学生16)などの改善すべき点が挙げられていた。本来であれば、この設問では、「ビデオ視聴すること」についての短所を尋ねていたのだが、ほとんどの学生が「学生自身のパフォーマンス」についての短所を挙げていた。

設問3の「他の学生のスピーチ映像を見ることについての意見」に対する回答では、グループ1では肯定的な意見が多く見られた。例えば、「韓国語能力がわかると思った」(学生10)、「聞き取りになるからいい」(学生4)、「みんな前より今のほうがペラペラ」(学生3)といった意見があり、また「楽しかった」と述べていた学生が3人いた。一方、グループ2では他の学生の成長、特に留学した学生に関する記述が多く見られ、例えば、「文脈とかいろいろしっかりしていて良かった人がいた」(学生16)や「留学組の韓国語能力が、アップしていて羨ましかった」(学生11)、「やっぱり留学から帰ってきた人達は上手くなっているなと感じた」(学生12)というようなコメントが挙げられた。

最後に、「ビデオを使った振り返りによる効果」(設問4)に対する回答を記述統計で分析したところ、5段階評定でグループ1($M = 3.30$, $SD = 0.48$)、グループ2($M = 2.67$, $SD = 0.82$)という結果であった。学生の回答結果に対してシャピロ=ウィルク検定を行った結果、データは正規分布に従わないことが示された($p = .016$)。なお、ルビーン検定を通じて分散の等質性は示された($p = .096$)。続いて t 検定を実施し、2グループ

の平均値差を検討したところ、信頼区間は95%CI [-0.06, 1.32]であり、有意な差は見られなかった ($t(14) = 1.97$, $p = .069$, $d = 1.02$)。さらに、1標本の t 検定を行い、理論的中点である3点(1:ほとんど効果がない, 5:とても効果がある)から各グループの回答の平均値が有意に離れているかを検討した。その結果、グループ1は $t(9) = 1.96$, $p = .081$, グループ2は $t(5) = 1.00$, $p = .363$ といずれのグループにおいても有意な差は認められなかった。

4. 考察

本実践では、(1) 韓国語学習者のビデオ視聴による効果への認知、(2) ビデオ活用方法の相違による視聴効果の確認について検証することが目的であった。

4.1 韓国語学習者のビデオ視聴による効果の認知

1つ目の課題については、学生のコメントを検討した結果、言語に対する気づきを高めたり、学生の言語能力の変化を視覚的に確認したりする可能性が示された。外国語教育の観点から、英語学習者だけでなく韓国語学習者にとっても、ビデオを用いた振り返りは学生の言語に対する気づきを高めるきっかけになることが示された。グループ1は、ビデオの中で他の学生や学生自身が話している韓国語と韓国語教師が授業で使っている韓国語を比較した際に、その話し方にギャップが生じ、音声に対する気づきが起こっていると考えられる。第二言語習得論における気づきには、インプットとアウトプットがある(赤木, 2020)。インプットでは、言語形式、規則、言語の運用に対する気づき、そしてアウトプットでは、ギャップに対する気づきと目標言語と中間言語の違いに対する気づきに分けられる。本実践の学生のコメントから、ビデオ視聴の効果として、音声などの言語形式への認知につながったと考えられる。

また、グループ2のコメントに「成長」や「変化」が使用されていたことから、2時点でのスピーチが撮影され、学生がビデオを視聴し、視覚的に確認できたと考えられる。他者との比較だけでなく、学生の異なる2時点の比較、つまり、継時的比較(temporal comparison)が起こり、自身

の外国語によるパフォーマンスの成果を客観的に評価する機会となりうる事が期待されたからだろう。グループ 1 は 1 回しかスピーチを実施しなかったにもかかわらず、視聴時に他者との能力比較が行われていることから、1 時点でのビデオの視聴でも学生の成長や変化を見つけるのは可能であるが、複数時点におけるビデオを用いたほうが学習者のパフォーマンスに対する評価を、より客観的に実施できるだろう。

4.2 ビデオの活用方法の違いによる効果の確認

2 つ目の課題については、グループ 1 と 2 におけるビデオの視聴頻度などを含む活用方法の違いによる効果について分析した結果、両グループのビデオ活用方法の違いによる効果は確認できなかった。この原因として、まず、実践に参加した学生数 ($N = 16$) が少なかったことが考えられる。第一著者が担当していた授業では 1 年生 29 名、2 年生 13 名がそれぞれ履修していたが、参加希望者は各学年の半分以上であった。今後のために参加を希望しない学生を詳しく分析し、対策を立てることで参加学生数を増やし、本実践のような研究が外国語教育の質向上につながることを学生に周知させる必要があるだろう。

もう一つは、この「授業のなかでスピーチ発表をビデオ撮影し、その映像を他の学習者と一緒に振り返ることは、外国語学習にどのくらい効果があると思いますか」という設問内容が漠然としていたことにより、2 グループのビデオの活用方法が異なっていたにもかかわらず、統計的な差が出なかった可能性がある。例えば、ビデオ撮影はあまり好まないが、ビデオ視聴は楽しい、あるいはその反対に考える学生もいたかもしれない。学生ごとに、この設問での効果の意味が異なっていたため、妥当性の問題が生じていた可能性もある。そこで今後は、できるだけ簡潔で誤解を与えないような表現を用いた設問を使い、測定しようとしている学生の心理現象を的確に測定していくことが必要だろう。

4.3 先行研究との比較

先行研究と比較すると、本実践は目標言語、パフォーマンスに対する教師による評価の有無、学習者による自己評価・ピア評価の実施という点に

において大きく異なっていた。英語学習者を対象としたビデオ研究(Okada et al., 2017, 2018a, 2018b)では、スピーチは教師による評価の対象とされ、学習者による自己評価やピア評価も実施されていた。一方、韓国語学習者を対象とした本実践では、スピーチは評価の対象となっておらず、自由記述回答は実施されたが、自己評価やピア評価は行われなかった。それにもかかわらず、英語以外の外国語学習者を対象としたビデオ活用の可能性が示唆されたことは、今後の韓国語学習者の研究において重要である。

また、グループ2のコメントから「恥ずかしい」や「羨ましい」などの心的状態を表す言葉が出現していることから、自己効力感が低い学生が含まれていたことが推測される。先行研究(Adams, 2004)では、他の学習者のビデオを視聴すると自己効力感(Bandura, 1977, 1986)が高くなることを報告しているが、本実践の結果は先行研究のそれとは一致しなかった。その理由として、対象者や言語の違いが考えられる。先行研究(Adams, 2004)ではオーストラリアの大学院で学んでいる留学生が対象であったため、英語を使用できるようになることは必須であった。このようなアカデミックな場面では、同じ世代で同じ立場にいる者による社会的比較(Festinger, 1954)が起こり、他の学習者をモデルとしたビデオ視聴が英語を必要としている留学生にとって大きな励みになることを示唆していた。一方、本実践の対象者は国内の短期大学で韓国語を学んでいる女子学生であり、なかでもグループ2の学生は卒業を控えていたことから、韓国語学習を卒業後も継続するという期待感より、韓国語に対する学習意欲が低くなり(岡田, 2022)、卒業すれば勉強する必要がなくなるだろうという解放感のほうが強かったのではないかと推測される。

4.4 本実践の意義

岡田(2022)が韓国語学習者の動機づけの特徴を明らかにしているように、本実践の実践的意義は韓国語を学んでいる学習者によるビデオ活用の効果を検証することにある。英語のように様々な国で使用されている言語とは異なり、韓国語を使用する人や場所は限定されている。世界で最も話されている言語ランキング⁹によると、英語話者が最も多く約11億3000

⁹ 次のサイトを参照。<https://word.tips/100-most-spoken-languages/>

万人であるのに対し、韓国語話者は約 7700 万人にすぎない。学生が韓国語を外国語として学習したとしても、その言語を利用する機会を見つけるのは容易でないだろう。国内で韓国語を学んでいる若者の多くは K-POP などの韓国の大衆文化に関心を寄せていることから、この大衆文化への関心とビデオを結びつけた実践方法を取り入れることも検討していくべきだろう。本実践ではスピーチビデオの活用を検討したが、今後は学習者の興味のある韓国人アーティストに向けたビデオレターなどを作成したり、自己評価やピア評価を取り入れたりしながら、韓国語でのスピーキングやパフォーマンスの技術力向上を目指していくことも考えられる。

5. 本実践の限界

本実践の限界として、まず、両グループに共通していることだが、スピーチ発表が成績評価に含まれていなかったため、事前の準備をせずに発表に臨んだ学生が含まれていたことが挙げられる。スピーチの準備に対して、学生が真摯に取り組んでいたら振り返りのコメントの内容は若干異なっていたかもしれない。2 つ目は、振り返りのコメントの文字数を指定しなかったため、コメントのほとんどが短くなってしまったことである。分析する際に内容が浅くならないようにするため、一定量のコメントを記述させるような指示文を提示すべきだろう。あるいは、個別にインタビューを実施することで、学習者の本音を聞けるかもしれない。3 つ目は、自由記述の設問の意味を学生が取り違えたことにより、研究者が意図した回答を得られなかったことである。設問 1 と 2 では、本来は、「(一般的に) 自分のパフォーマンスを視聴することの良い点・良くない点」を求めていたが、学生の記述の多くは「自分のパフォーマンスの良い点・良くない点」について述べていた。今後、学生から回答を求める際には、曖昧な表現を用いた設問を避けるよう注意すべきだろう。最後に、サンプルサイズの少なさが、テキストデータの分析や統計分析の結果に影響していたことも否定できない。参加者が少なかった原因については考察で述べたが、今後の研究ではなるべく多くの学生が研究に興味を示してもらえるように研究協力への参加を呼び掛けたい。

6. まとめと今後の課題

本実践にはいくつかの限界はあったが、韓国語学習者のビデオ視聴による効果として、韓国語学習者のスピーキングや成長への気づきをもたらすことが示された。一方で、ビデオの活用方法の違いによる効果を検討した結果、2グループには視聴効果の差は見られなかった。本実践では国内で韓国語を学習している日本人短大生を対象としていたが、スピーチビデオは学習者のスピーキング力やパフォーマンスのスキルを可視化できることから、英語や韓国語以外の学習者にも利用可能であることを提案したい。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 19K00842 の助成を受けた。また、第一著者が清泉女子大学言語教育研究所客員所員として活動した研究成果である。

付記

本研究の結果は、Globalization and Localization in Computer-Assisted Language Learning Virtual Conference 2021 で発表された。

参考文献

- Adams, K. (2004). Modelling success enhancing international postgraduate research students' self-efficacy for research seminar presentations. *Higher Education Research & Development*, 23, 115-130. <https://doi.org/10.1080/0729436042000206618>
- 赤木浩文 (2020). 第二言語学習における「気づき」について. 『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』, 21, 261-272.
- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84(2), 191-215. <https://doi.org/10.1037/0033-295X.84.2.191>
- Bandura, A. (1986). *Observational learning*. In *Social foundations of thought and action: A social cognitive theory* (pp. 47-105). Prentice-Hall.
- Codreanu, E., Sommerhoff, D., Huber, S., Ufer, S., & Seidel, T. (2020). Between authenticity and cognitive demand: Finding a balance in designing a

- video-based simulation in the context of mathematics teacher education. *Teaching and Teacher Education*, 95, 103146. <https://doi.org/10.1016/j.tate.2020.103146>
- Festinger, L. (1954). A theory of social comparison processes. *Human Relations*, 7, 117-140. <https://doi.org/10.1177/001872675400700202>
- Gröschner, A., Schindler, A.-K., Holzberger, D., Alles, M., & Seidel, T. (2018). How systematic video reflection in teacher professional development regarding classroom discourse contributes to teacher and student self-efficacy. *International Journal of Educational Research*, 90, 223-233. <https://doi.org/10.1016/j.ijer.2018.02.003>
- Hamel, C., & Viau-Guay, A. (2019). Using video to support teachers' reflective practice: A literature review. *Cogent Education*, 6(1), 1673689. <https://doi.org/10.1080/2331186X.2019.1673689>
- 松岡みさ子 (2018). プレゼンテーション力向上のためのスマートフォン効果的活用法 : 利便性を自己省察に活かして. 『大妻女子大学紀要社会情報系社会情報学研究』, 27, 89-97. <https://cir.nii.ac.jp/crid/1050001202563157632>.
- Meadows, B., Taylor, M., Rayment, T., Johnson, J., & Mahon, M. (2020). Video reflection: An emerging tool for training client-centred communication skills in staff supporting adults with learning disabilities in an education setting. *British Journal of Learning Disabilities*, 48(2), 132-141. <https://doi.org/10.1111/bld.12307>
- 三木訓子 (2020). ビデオ視聴による自己フィードバックをプレゼンテーション能力向上につなげる試み. 『JACET 関西支部紀要』, 22, 118-123. <https://cir.nii.ac.jp/crid/1520009407819561472>
- 岡田靖子・いとうたけひこ (2014). 自己評価・ピア評価から見た学習者のビデオ映像活用の効果. 『日本大学経済学部研究紀要』, 76, 47-55.
- Okada, Y., Sawaumi, T., & Ito, T. (2017). Effects of observing model video presentations on Japanese EFL learners' oral performance. *Electronic Journal of Foreign Language Teaching*, 14, 129-144.
- 岡田靖子・澤海崇文・いとうたけひこ (2018). 英語授業におけるビデオ

映像を活用したアクティブラーニング. 『外国語教育メディア学会
関東支部研究紀要』, 2, 23-37.

Okada, Y., Sawaumi, T., & Ito, T. (2018a). How do speech model proficiency and viewing order affect Japanese EFL learners speaking performances. *Computer-Assisted Language Learning-Electronic Journal*, 19, 61-81.

Okada, Y., Sawaumi, T., & Ito, T. (2018b). A Replication of Okada, Sawaumi, and Ito (2017): Effects of viewing speaker videos by proficiency order on Japanese EFL learners' speaking skills. *Electronic Journal of Foreign Language Teaching*, 15, 388-404.

岡田靖子 (2022). 韓国語学習者の動機づけモデル構築: 予備的研究. 『言語教育研究』, 14, 1-25.

Yang, H. (2021). Epistemic agency, a double-stimulation, and video-based learning: A formative intervention study in language teacher education. *System*, 96, 102401. <https://doi.org/10.1016/j.system.2020.102401>